美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

5

2013 May/Jun

TAKE FREE

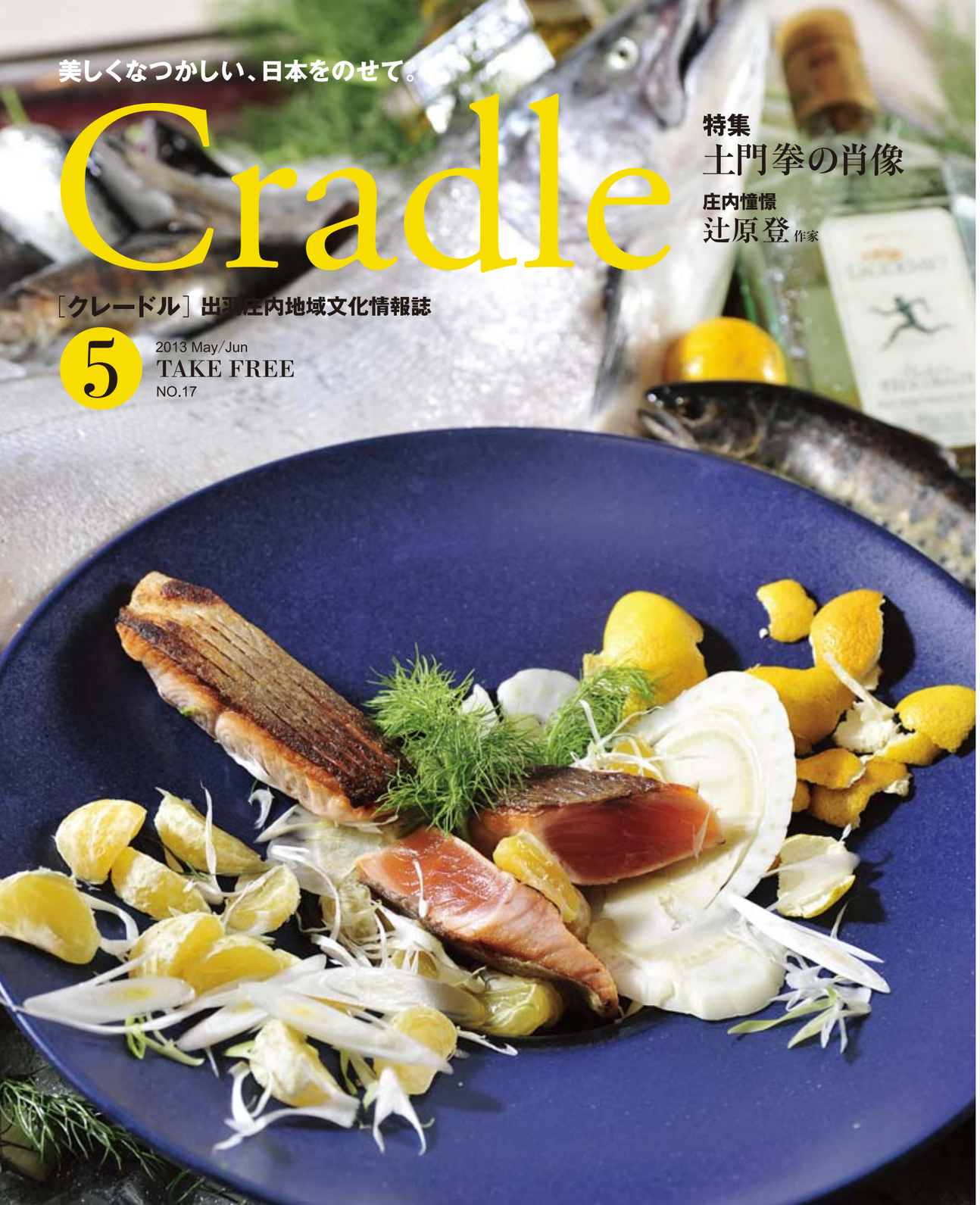
NO.17

特集

土門拳の肖像

庄内憧憬

辻原登 作家



Cradle 5

美しくなつかしい、日本をのせて。

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

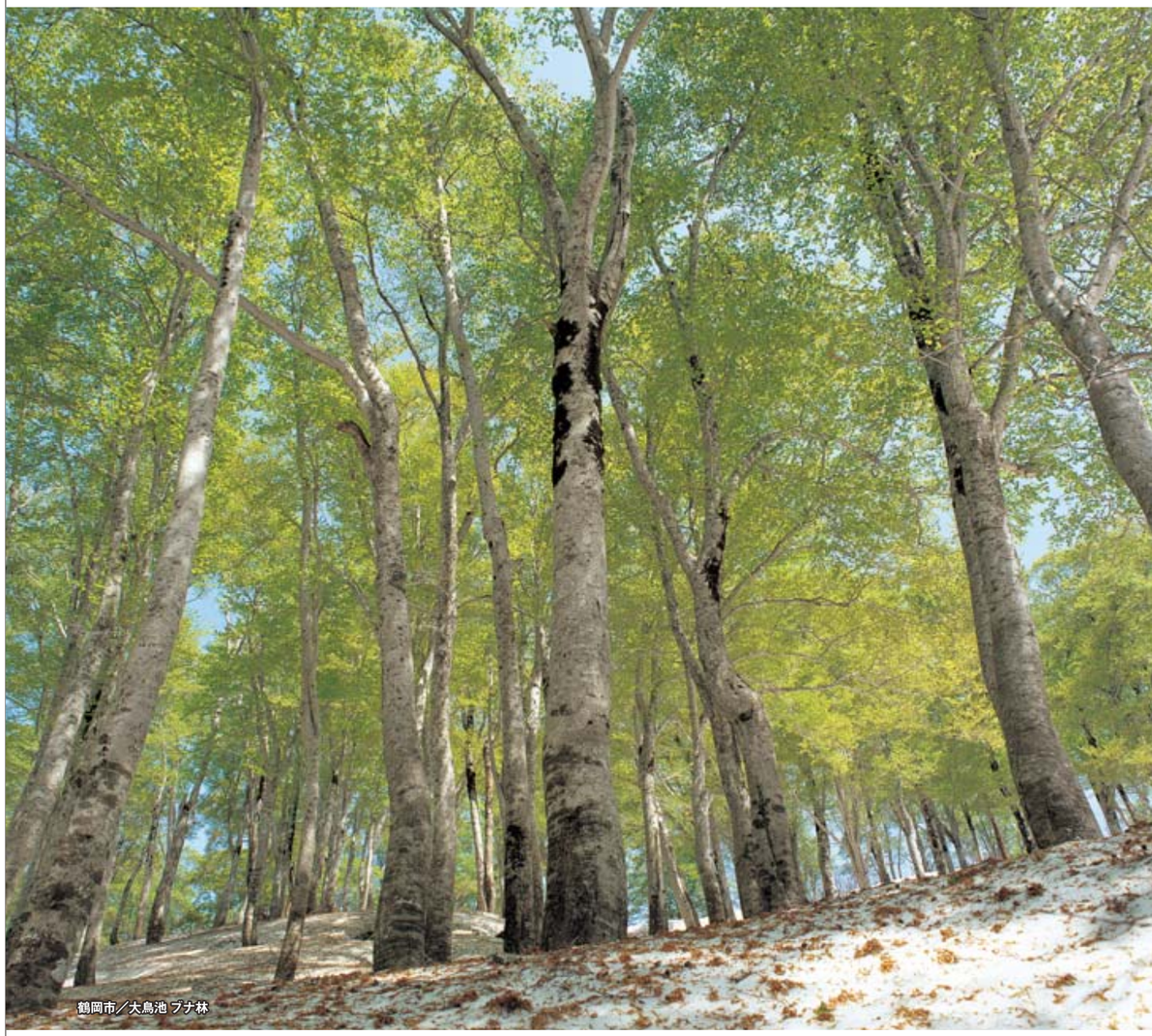
2013 May/June

平成25年5月1日発行（隔月奇数月発行）第3巻5号（通巻17号）

発行／Cradle事務局　山形県鶴岡市山王町8-15（株式会社 出羽庄内地域デザイン）電話0235（64）0888

制作／Cradle編集部　山形県酒田市亀田2-59-3（コマツ・コーポレーション）電話0234（41）0012

FIDEA GROUP



鶴岡市／大鳥池 ブナ林

風さわやかに　新緑きらめく　初夏の庄内

荘内銀行

対岸の人なつかしき…

辻原 登

私をこんなふうに鶴岡と結び付けたきっかけは、丸谷才一という偉大な文学者との出会いだった。大きな、計り知れないほど大きな薫陶を丸谷さんから受けた。

縁あって、庄内鶴岡に十五年来、一年に一度は楽遊して、見たもの、味わったもの、触れたもの、出会ったものを列挙すると……。

大山の酒、三瀬の家並みと坂本屋のどんがら汁、庄内柿、松ケ岡開墾場、鶴岡城址と致道博物館、藤沢周平記念館、まちなかキネマ、湯田川温泉、だだちゃ豆、鳥海山登山、月山・湯殿山・羽黒山三山巡礼、黒川能、最上川下り、クラゲ水族館…ときりがない。こう書き連ねてゆくだけでも陶然となる。これらすべてが、私の肥やしになっている、とつくづく感じる。庄内の風土と人、その時空間は、私の中で特権的な位置を占めている。何をおいても、まず鶴岡へ。

現在の私の夢は、松ケ岡開墾場の大蚕室で、ロイヤル・シェイクスピア劇団による『十二夜』と、文楽の『心中天網島』の競演をプロモートすることだ。

私をこんなふうに鶴岡と結び付けたきっかけは、丸谷才一という偉大な文学者との出会いだった。大きな、計り知れないほど大きな薫陶を丸谷さんから受けた。

その丸谷さんの故郷を、遠く離れた南の紀伊半島生まれの私が訪ねる。丸谷さんが幼少時代に吸った空気を、いま呼吸しているのだという恍惚。

丸谷さんはどうやら鶴岡をあまり好きでないらしいという噂を耳にすることもあったが、それはそれとして、私がお会いして、この間、鶴岡へ行ってきました、と色々たのしかったことを報告すると、うんうん、とうなずいて微笑まれる。

その丸谷さんが亡くなられた。丸谷さんは実は、鶴岡を深く愛していた。亡くなられて、より強くそう思う。

例えば、歌人の岡野弘彦氏が総合月刊雑誌『中央公論』に寄せた追悼文の中にこんなエピソードがある。

ある時、（丸谷さんが）約束の時間を珍しく少し遅れて、妙にしっとりとした感じで会場に入ってきて、「いやー、久しぶりで郷里の言葉に泣いてきたよ」と言った。映画の『蟬しぐれ』を見た後だった。

亡くなる一ヵ月ほど前、丸谷さんは岡野弘彦、長谷川櫂氏と歌仙を巻いた。

対岸の人なつかしき花の河

丸谷さんの最後の句である。はなやいでいるようでいて、どこかさびしい。河は最上川だろうか。赤川だろうか。私たちはどっちの岸にいるのだろうか。

鎌倉霊園に新しく建てられた丸谷さんの墓石には、「出羽鶴岡の人」と刻まれている。

松ケ岡開墾場

つじはら・のぼる／小説家。1945年、和歌山県生まれ。90年、『村の名前』で芥川賞、99年『翔べ麒麟』で読売文学賞、00年、『遊動亭円木』で谷崎潤一郎賞、06年『花は桜木』で大佛次郎賞ほか多くの受賞歴があり、昨年は『韃靼の馬』が司馬遼太郎賞、同年、紫綬褒章を受章した。昨年、87歳で逝去した丸谷才一と親交が深く、自身の小説『発熱』では作品の舞台に鶴岡、三瀬、松ケ岡などを描いている。昨年11月10日には松ケ岡開墾場で開かれた「松ケ岡文化講演会」で講演。

※「中央公論」平成24年12月号より一部引用

特集 土門拳の肖像

北国酒田に生まれ、写真界で圧倒的な存在を放った土門拳。
自らの確然たる眼差しで、体当たりで時代と向き合い
愛する日本と、そして日本人を終生追い続けました。
その渾身の一枚一枚は、どれほど多くの言葉よりも鮮鋭に、
日本人として生きる、その心を問いかけてきます。

1.原爆ドーム『ヒロシマ』（昭和32年） 2.重の井「恋女房染分手綱」『文楽』（昭和16年） 3.雪の鐙坂 金堂見上げ『女人高野 室生寺』（昭和53年）

〈参考〉土門拳『死ぬことと生きること』1974年・築地書館（★1）／土門拳『続　死ぬことと生きること』1974年・築地書館／阿部博行『土門拳―生涯とその時代―』1997年・法政大学出版／阿部博行編『土門拳エッセイ集 写真と人生』1997年・岩波書店（★2）／『別冊太陽 土門拳 鬼が撮った日本』2009年・平凡社／土門拳『手―ぼくと酒田』1983年・土門拳記念館／成田晴夫『ふたつの庭』1986年・みちのく豆本の会／『土門拳 ぼくと酒田』2010年・みちのく豆本の会（★3）／「土門拳と酒田」2009年・酒田市光丘文庫館報132号「光丘」／「土門拳記念館の建築」谷口吉生・土門拳記念館建築概要しおり／『土門拳記念館1995』1996年・酒田市
〈取材協力〉公益財団法人土門拳記念館／阿部博行、白畑晋

平等院鳳凰堂大棟鳳凰撮影中の土門（昭和39年）

特集 土門拳の肖像

写真家、土門拳が生きた時代。そして伝えたかった日本。

日本人としてのぼくは、どこの国よりも、日本が大好きである。そして、日本的な現実に即して、日本的な写真を撮りたいと思っている

――『ぼくの名前』『死ぬことと生きること』築地書館　1974年

土門拳と写真との出会いは24歳の時。当時、将来が見えず絶望の日々を送っていた土門にとって、母が薦めた写真の仕事は「万策尽きた後の道」。これが、後に日本を代表する写真家の第一歩です。

土門の代表作に、文化人らの肖像を写した『風貌』がありますが、土門自身の風貌といえば、見るものを射抜くようなギョロリとした眼差しに象徴されます。撮影となるとその眼力で被写体を凝視し、長い対話の後、沈黙を破るようにシャッターを切り始める、その迷いのない瞬間こそ、土門が重視した「シャッターチャンス」。渾身の力で一枚一枚、膨大なフィルムを費やす非凡なエネルギーから「写真の鬼」の異名をとりました。

明治から昭和という激動の時代をたと思います」。しかし、戦争が始まるとしばらくして土門は、時流に逆らうようにして仏像や文楽の撮影に没頭していきます。終戦後、久しぶりに訪れた室生寺では「戦争さわぎの間に見失っていた『日本の風土』を新鮮な色彩をもってぼくの眼によみがえらせた」[★2]と、その後さらに古寺や仏像など日本の永久的な美しさを追求していきました。

一方で、敗戦後の日本を襲った厳しい現実にも目を向けました。街にあふれる浮浪者や靴磨き、傷痍軍人たちから目をそらさず「現実を直視し、現実をより正しい方向に振り向けようという抵抗の精神」[★2]で、土門は日本の写真界に「リアリズム写真」という持論を打ち立てます。その手法は「カメラとモチーフの直結」「絶対非演出の絶対スナップ」。今でいうヤラセのない真実を捉えることで、「今に生きる人間としての怒りや喜びや悲しみが結晶されている世界」[★2]を一枚の写真に託したのです。

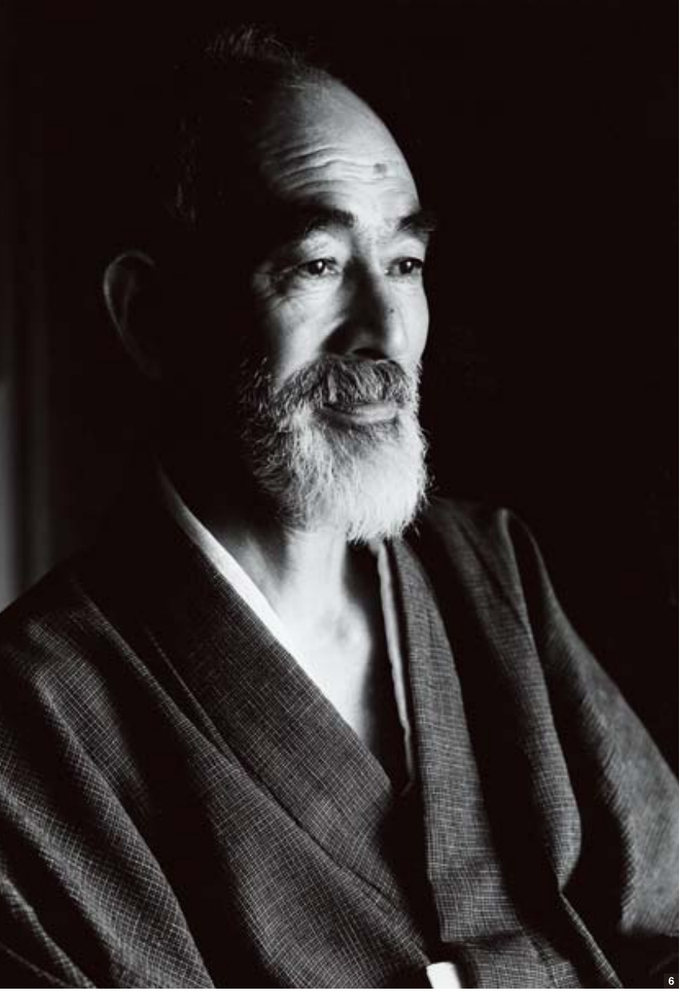
「リアリズム写真はアマチュア写真家らに強く支持されました。しかし土門自身、そのテーマを模索して壁にぶち当たったこともあったようです。そしてたどりついたのが『ヒロシマ』でした」。終戦から12年後の広島を訪れた土門は、原爆という魔の爪跡を目の当たりにし、苦しみ続ける被爆者の姿をありのままに伝え、世間に大きな衝撃を与えました。当時大学を出たばかりの大江健三郎がこれを激賞し、後に『ヒロシマ・ノート』を書いたことも有名です。

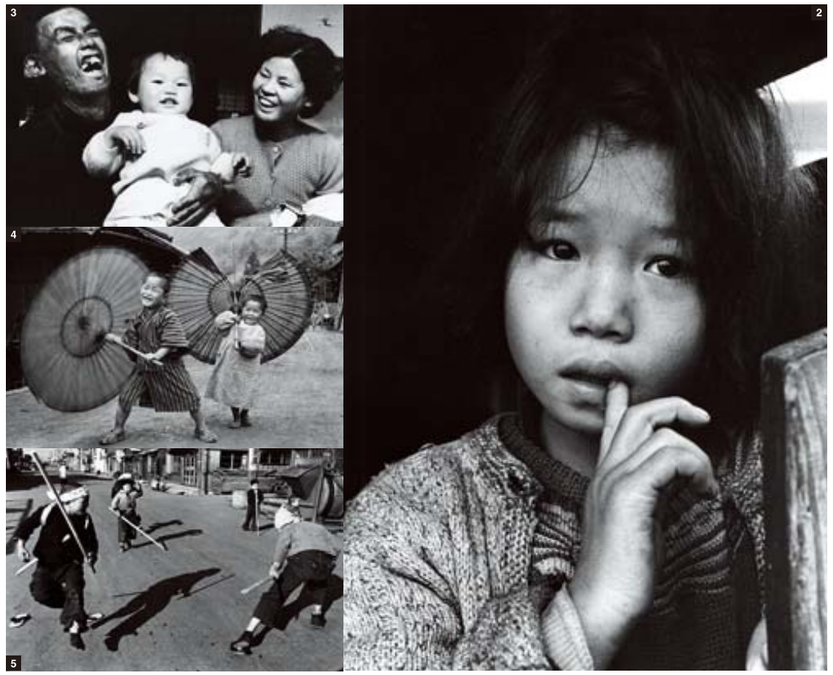
「土門はその後、病に倒れながらも車椅子で撮影を続け、やがて意識を失い、それでも11年間生き続けました。きっと『撮りたい』という一心だったと思います。写真家としては天才ではなく努力の人。東北人の粘り強さで日本を撮り続けた執念こそ、土門の真骨頂でしょうね」。

「写真という名の道楽ではなしに、写真という名の芸術」[★2]。写真を社会的にも文化的にも意義あるものにしようと、執念と命を燃やした土門拳の眼差しは、今も写真の中に生き続けています。

生きた土門の写真人生について、『土門拳―生涯とその時代―』の著者である鶴岡市の阿部博行さんにお話を伺いました。

「土門が写真家になった頃、日本は戦争の時代に入っていきます。写真は重要なメディアでしたから、日本の対外宣伝に利用されました。例えば5台の戦車を100台あるように合成する、まさに演出ですね。戦前は土門も最小限度の演出は決して間違いでないと信じてい





1.室生寺弥勒堂　釈迦如来坐像左半面相『古寺巡礼』（昭和41年）、2.るみえちゃん『筑豊のこどもたち』（昭和34年）、3.被爆者同士の結婚『ヒロシマ』（昭和32年）、4.傘を回す子ども（昭和12年頃）、5.近藤勇と鞍馬天狗（昭和30年）6.志賀直哉『風貌』（昭和26年）日本の古典と社会問題という一見相反したモチーフは土門にとって「日本民族のヴァイタリティを触発する」（★2）ための一貫したテーマだった。

写真家で名文家、芸術家であり職人だった人間、土門拳とは。

一回の室生寺行が、ぼくに一大決心をなさしめた。日本中の仏像という仏像を撮れば、日本の歴史も、文化も、そして日本人をも理解できると考えたのである

「仏像巡拝」『日本の仏像』1991年

特集 土門拳の肖像

写真界の巨匠は優れた筆力の持ち主でもあり、膨大なエッセイを残しています。一枚、一文、すべてに妥協を許さなかったという、その実像に近づきたくて、素顔をよく知るお三方に会いにいきました。土門の言葉と共に、写真の鬼の実像に迫ってみたいと思います。

——『古寺巡礼』で苦しい旅を続けている時、自分はなんでこんな苦労をするのかと考えさせられる。結局、一日本人としての自分自身が日本を発見するため、日本を知るため、そして発見し、知ったものをみんなに報告するためだということに思い至る[*1]——

藤森さんと堤さんは、昭和30年代後半から昭和40年代前半まで、土門の内弟子として『古寺巡礼』などの撮影助手を務め、苦楽を分かち合った同士。当時、土門は脳出血の後遺症がありながらも、ますます意欲的に古寺撮影に取り組んでいました。

土門の古寺を巡る旅は、昭和14年12月、美術評論家の畏友、水沢澄夫の案内で、奈良の室生寺を訪れたことに始まります。以来土門は仏教美術に傾注し、古寺の建築や仏像の撮影をライフワークとしました。

『古寺巡礼』全五集に収められたのは、京都、奈良を中心とした39ヵ所の寺。静謐な祈りの造形に迫った不朽の作は、約15年間の撮影期間を費やした土門美学の集大成です。

今の時代、写真は写って当然ですが、土門の頃はカメラにストロボ機能もなく、暗いお堂での撮影は、外からの自然光に頼るか、閃光電球（フラッシュバルブ）によるライティングのどちらかで行われました。試し撮りもできず、撮影は一発勝負。結果は成功か失敗の二つに一つで、失敗なら再び撮影へ、というやり方でした。それにも増して土門の撮影はカット数も多く、かかる時間も人一倍。土門には目の前の仏像とじっくり向き合う必要があったためです。「見たままの美しさを写すだけでなく、仏像の心の奥底までも見せたい。そのために先生は仏像を徹底的に学んでいました。自らが仏像に入り込んででも、その心持ちをつかみ取ろうと、何度も同じ仏様を撮るんです」（堤）

いざアングルが決まってしまえば撮影は迷いのない速さで、被写体に肉薄するようにシャッターを切り続けたといいます。「全体像、次は半身と撮影する順序はいつも決まって正確でした。撮っていくうちに今のアングルはダメだと直感したら、また頭から撮り始めるんです。完全にその仏像一体を自分のものにしないと気がすまないんでしょうね」（藤森）

撮影は土門と助手との一体作業。カメラを構えてピントを合わせるのは助手の役目。土門は、竿の先に電球をつけたライトを持ち、仏像の上、下、前、側面と一点一点、ライトを当てて発光していきます。そのたびに助手はシャッターを開閉して点光を記録し、その記録を合わせて1枚の写真を作るという手法。そのため、大きな仏像の写真1枚に10発もの電球を使うこともあったといいます。師弟間の信頼関係と、あうんの呼吸があったからこそ成しえた作業でした。

「先生のライティングは天才的でしたね。まるで仏師が仏像を彫るように、先生は光で彫刻をしていました」（藤森）

1

2

藤森 武さん
Fujimori Takeshi

写真家、土門拳記念館理事。『古寺巡礼』『信楽大壺』などで助手（昭和37年〜42年）

1.聖林寺 十一面観音立頭部（昭和39年）「僕が撮影用のカラー電球を忘れて、現場で白の写真電球に色を塗ったんです。結果的に良い発色の写真が撮れた。これこそ“鬼がついた”写真」（藤森）
2.平等院鳳凰堂の屋根の上で。（左から）堤さん、藤森さん、1人置いて、土門拳（昭和39年）。

3月吉日、土門拳文化賞の授賞式のために来庄された土門家のご長女である池田真魚さんと土門に師事した写真家の藤森武さん（左）、堤勝雄（右）さんに思い出話を聞かせていただきました。

年譜

1909（明治42）0歳
山形県飽海郡酒田町鷹町15番地（現相生町）に、父熊造、母とみの長男として生まれる。両親が働きに出たため祖父母に育てられる

1916（大正5）7歳
先発していた父母のもとへ上京

1923（大正12）14歳
神奈川県立横浜第二中学校（現横浜翠嵐高校）に入学。将来は画家志望

1926（大正15・昭和元）17歳
父の女性問題で母と家を出る

1928（昭和3）19歳
中学校を卒業。逓信省の日雇い作業員、常磐津三味線の内弟子や弁護士の書生など、転職を重ねる

1932（昭和7）23歳
農民運動に参加し拘留。転向し、何度も自殺を考える

1933（昭和8）24歳
母の勧めで宮内幸太郎写真場の門生となり、営業写真を職とするやがて報道写真を志すようになる
父熊造、死去

1935（昭和10）26歳
宮内写真場を〝朝逃げ〟して、名取洋之助が主宰する日本工房に入社

断崖の窪みに建立された三仏寺の国宝投入堂。土門は険しい登拝道を、藤森さん、堤さんら内弟子と外弟子らの助けで登り、内陣を撮影（昭和42年）。

1936（昭和11）27歳
対外宣伝グラフ誌『NIPPON』（日本工房刊）に掲載するため、伊豆で「鮎突く子ら」などを撮影
1938（昭和13）29歳
明石町に転居
1939（昭和14）30歳
日本工房を退社、国際文化振興会の嘱託となる。中村たみと結婚。12月、水澤澄夫の案内で初めて室生寺を訪れる
1940（昭和15）31歳
日本報道写真家協会を結成
長女真魚誕生
1942（昭和17）33歳
次女真菜誕生
1944（昭和19）35歳
三女真耶誕生
1945（昭和20）36歳
召集令状が届き、山形連隊に出頭するが、痔疾のため即日帰郷。終戦と同時にフリーランスとなる
1946（昭和21）37歳
戦後初めて室生寺を訪ねる
1947（昭和22）38歳
次女真菜が自宅近くの防火用水に落ち死亡。仕事ができず、用水脇に立ち尽くす日が続く
1950（昭和25）41歳
『カメラ』月例写真コンテストの審査員となり、リアリズム写真を提唱アマチュアの指導に注力
1951（昭和26）42歳
浮浪者、靴磨き、傷痍者などを題材とした連作を『カメラ』に掲載、高い評価を受ける
1953（昭和28）44歳
『風貌』刊行
1954（昭和29）45歳
『室生寺』刊行
1955（昭和30）46歳
第1回個展を開催（東京・日本橋高島屋、山形・本間美術館）

――『なんて間がいいんでしょ』と言いたくなる写真がある。あまりに間がいい写真は、かえって嘘になる――[★1]

「土門の写真は必ずしもきれいきれいじゃない、標本写真にはならないんです。何が違うかといえば、温度感が違う。石も、金銅仏も、どの写真も熱くて、あったかいんです」（池田）

土門は弟子たちに「写真は人から教わるものではない」といい、あれこれ訓導することはなかったといいます。「写真は、自分の美学を表現する手段に過ぎません。先生は自分の美学を確立していて、そこに近づくため常に闘っていた。プロの写真家の生き様を、僕らに見せてくれましたね」（藤森）

「今僕たちが先生の撮影を再現したら、90点ぐらいの写真は撮れるかもしれない。だけどあと10点は、そこに土門拳がいるかいないかなんです。僕たちは先生が倒れる前の、一番いい時期に弟子をさせてもらいました。写真との向き合い方を身をもって教わることができましたからね」（堤）

ひとたびカメラを持てば仕事の鬼、カメラを置くと人が変わったように優しくシャイで、不器用。自宅には常に弟子たちを寝泊りさせる寂しがりやの一面もあったようです。「土門は子どもが好きで、子どもにもよく好かれました。でも家庭ではいつも撮影に出ていないし、いても寝ているか本を読んでいるか。そんな父でしたが、私が写真の大学に進んだのは『女も仕事を持って、手に職を持っていたほうがいい』という父の助言があったからです」（池田）

――日本の古典を追求する仕事と、アクチュアルな社会問題と取り組む仕事とは、一見矛盾し、相反するように見えるが、ぼく自身にとっては同じことだった。（中略）日本民族のヴァイタリティを触発すること、対象はちがっても、ただそれだけがぼくの関心だった――[★2]

土門の仕事は、『ヒロシマ』『筑豊のこどもたち』のようなドキュメンタリーがあり、『古窯遍歴』『文楽』といった日本の伝統美があり、表面的には両極のモチーフを追っているかのように見えます。しかし土門には終生ぶれることのない一貫したテーマがありました。古寺巡礼の撮影中に勃発した、羽田闘争。堤さんはこの時、足の不自由な土門を連れてその最前線に足を踏み入れています。「古寺と闘争、その根底に共通するのは「日本人」ですよね。日本人の根源性を、土門拳は突き詰めたかったのだと思います」（堤）

「その時、デモ隊に巻き込まれて撮った写真は『いいかどうかわからん』といつも言っていました。混乱の中では自分の想いが写せるとは思えないって。土門は、高度成長にかかった日本をほとんど取材していません。おそらくその頃の社会に納得していなかったんでしょう。もし今、この時代を生きていたら、一日本人として怒りと反省と、納得とを繰り返しながら、やっぱり土門拳の写真を撮り続けていたでしょうね」（池田）

――ぼくは『古寺巡礼』全五集を、ぼくの分身として、また『ひとりの日本人の、みずからの出自する民族と文化への再確認の書として、愛惜の書として』世に残すことができた。日本人たる写真家として、その使命を全うできたぼくは、仕合せものである――[★2]

いい写真というものは、写したのではなくて、写ったのである。計算を踏みはずした時にだけ、そういういい写真が出来る。ぼくはそれを、鬼が手伝った写真と言っている

「肖像写真について」『風貌』1953年

domon 特集 土門拳の肖像

池田真魚さん
Ikeda Mao
土門拳記念館館長。土門拳、たみ夫妻の長女。

堤 勝雄さん
Tsutsumi Katsuo
写真家、土門拳記念館理事。
昭和38年から6年間、助手を務める。

1.法隆寺東院 夢殿露盤（昭和35年） 2.法隆寺にて。真魚さんの笠は土門がかぶせたもの。3.真魚さんが助手として同行したことも。4.東大寺大仏殿　毘盧舎那仏頭部（昭和42年）「真夏の太陽の光がお堂の中に差し込んでいました。露出計では測れないそのわずかな外光が入ってこの緑が出た。僕は『土門色』と言っています」（堤） 5.古寺巡礼の取材旅行。左から堤さん、藤森さん（昭和35年）。

「鳳凰堂は静止しているどころか、目くるめく早さで走っている」（★2）と、無我夢中で1枚だけシャッターを切った平等院鳳凰堂の夕焼け（昭和36年）。

1956（昭和31）47歳
長男樹生誕生
1957（昭和32）48歳
5月、『婦人画報』の取材で41年ぶりに酒田へ帰郷、山王まつりを撮影。7月、初めて広島を訪れる
1958（昭和33）49歳
『ヒロシマ』刊行
1959（昭和34）50歳
筑豊炭田の取材後、過労のため脳出血を起こし、自宅療養となる
1960（昭和35）51歳
『筑豊のこどもたち』刊行。ザラ紙100円で、約10万部を売り上げるベストセラーに。2月、脳出血のため入院、後遺症が残る。不自由な体で安保・三池闘争や『古寺巡礼』を取材
1963（昭和38）54歳
『古寺巡礼』刊行開始（〜1975年）
1966（昭和41）57歳
麹町に転居。12月、三仏寺投入堂の内陣を撮影
1967（昭和42）58歳
秋田木地山のこけし作りの撮影で厳寒の木地山を取材
三仏寺を訪れ、懸崖につらら下がった投入堂を撮影
東大寺二月堂のお水取りを撮影
羽田闘争を撮影するが、右半身が不自由なため、悔しい思いをする
1968（昭和43）59歳
6月、2度目の脳出血で倒れ、九州大学附属病院に入院
1969（昭和44）60歳
母とみ死去
リハビリのため左手で花をスケッチ、以後、車椅子での撮影となる
1972（昭和47）63歳
「古寺巡礼」巡回展開催
『ヒロシマ』がニューヨーク近代美術館のパーマネントコレクションとなる
1973（昭和48）64歳
東寺「弘法大師生誕1200年祭」で勅使河原蒼風の献華を撮影
紫綬褒章を受章
1974（昭和49）65歳
酒田市名誉市民第一号となる
13年にわたる取材の集大成として『古窯遍歴』を刊行
1976（昭和51）67歳
『こどもたち』『風景』『ぼく』『写真作法』刊行
1978（昭和53年）69歳
3月、御所市の病院に1ヵ月ほど入院待機し、待望の雪の室生寺を撮影
1979（昭和54）70歳
酒田大火復興記念式典に出席
勅使河原宏の草月陶房窯開きの撮影を最後に、9月、脳血栓で三たび倒れ、以後11年間、意識不明が続く
1980（昭和55）71歳
酒田市に土門拳記念館建設が決定
勲四等旭日小綬章を受章
1981（昭和56）72歳
土門拳記念館建設期成同盟会発足
毎日新聞社が土門拳賞を制定
1983（昭和58）74歳
10月、土門拳記念館開館
『手―ぼくと酒田』刊行
1990（平成2）80歳
9月15日、心不全のため死去
酒田市では市葬が挙行される

年を経るごとに深まった、土門と酒田の縁

1.2.3.4.昭和32年の山王まつり。同年の『婦人画報』8月号に600コマ中27枚が掲載された。5.その時に宿泊先の山水ホテルで開かれた地元アマチュア写真家たちとの交流会。中心に土門がいる。6.7.昭和49年の酒田市第1回名誉市民賞顕彰式と祝賀パーティー。夫人の土門たみと参列。

6歳で酒田から東京に移り、以来ずっと途切れていた土門とふるさととのつながり。復活したのは戦後からしばらく経ち、『風貌』『室生寺』「江東の子どもたち」などを発表していた頃でした。

昭和30年、土門初の個展が東京の日本橋で開催。それを機に本間美術館の本間祐介館長は東京の自宅を訪ね、酒田でも作品展を開いてほしいと交渉しました。その甲斐あって同年7月、酒田での展覧会が実現。2年後の32年5月には『婦人画報』に掲載する山王まつりの撮影のため、土門がついに酒田へと向かいます。酒田駅に到着し、41年ぶりにふるさとの土を踏んだ土門。宿泊先に荷物を預け、休む間もなく子ども時代の家を探しに出かけました。

土門は明治42年、酒田の鷹町（現相生町）で生まれました。両親が北海道へ出稼ぎに出たため、台町（現日吉町）の祖父母が親代わりとなって育てますが、借金取りが毎日のようにやってきて祖母を責め立てるため、炬燵の中で悔し涙を流す幼少期を過ごします。

それから40年余りが過ぎ、当時の面影を残すものが何も見当たらない台町で「おめだがや、あの鼻たれのきがね小僧っ子は」というひとりの老人と再会。その老人に、かつてあった家の場所や思い出の桜の木の所在を確認した土門は、暗い思い出に包まれていた幼少時代に区切りをつけたかのように、それからは山王まつりの撮影に没頭しました。最終日の前夜には、地元の案内役を務めた人から熱心に誘われて、アマチュア写真家たちによる土門を囲む会に参加。これが縁となり、東京に戻ってからも彼らとの親交や写真指導が続き、ふるさととの新たな関係も築かれていきます。

しかし、次に土門が酒田を訪れたのは16年も先のことでした。その間、土門は全国を飛び回り、『ヒロシマ』『筑豊の子どもたち』などの話題作を次々発表。体力も気力も酷使する撮影の連続は徐々に体を蝕み、昭和34年の暮れに1度目の脳出血を、43年に2度目の脳出血を発症し、一時は意識不明の重体に陥ります。

酒田再訪は昭和48年、病床から復帰し、右半身不随という後遺症を抱えながらも、「古寺巡礼」の作品展で全国巡回をしていた頃でした。酒田でも展示会が行われることとなり、期間中、土門は会場の清水屋デパートに車椅子で参上。数え切れないほどのファンに囲まれ、サインをしました。

翌49年、酒田市名誉市民賞第一号となり、顕彰式の壇上で土門は突然「わたしの全作品を酒田市に寄贈したい」と発言し、人々を驚かせます。同じ日、土門は祖父との思い出の地、日和山公園を車椅子で訪れて、雲ひとつない青空のもと頂上から酒田港を眺めました。6歳で酒田を離れて60年が経ち、「酒田市名誉市民賞の重みがまだ首から消えない」その日に見る、ふるさと酒田の景色。土門は後日「ああー日和山はいつ行ってもうるわしい」[★3]とその感慨深い思いを文章に残しています。

翌年から土門は山王まつりの時期になるとたびたび酒田を訪れました。酒田大火復興式典に参列した54年5月には、市の依頼で山居倉庫や最上川、鳥海山などを撮影。しかしその仕上がりに満足せず、撮り直しの意向を伝えた矢先の同年9月、土門は脳血栓で三たび倒れ、亡くなる平成2年までその目が開くことはありませんでした。

長い空白期間を経て晩年、酒田への愛郷の念を深めた土門拳。11年間眠り続けたというその強靭な精神に思いを馳せる時、土門の魂は動かない体をよそに、自由自在に空を駆け回りながらふるさとを撮っていたのではと、そんな確信にも似た思いが浮かんできます。

冬は低く垂れこめて晴れる間もない雪空と
日本海の鉛色の海の白い波がしら、桃も李も桜も
一時に目の覚めたように咲き出す春、
夏の紺碧の空にくっきりと残雪光る鳥海山

「ぼくのこと」みちのく豆本『ぼく』1976年

DOMON 特集 土門拳の肖像

土門芸術を愛する心が生んだ日本初の写真美術館

背後に飯森山となだらかな松林の丘を控え、前面に池が広がる土門拳記念館は、土門の全作品7万点を収蔵・保管しながら、土門の精神を静かに力強く伝えています。

最上川のほとり、酒田市の飯森山公園の中にある土門拳記念館は、今年10月で30周年を迎えます。

昭和49年、土門の「全作品を酒田市に寄贈したい」との言葉から始まった記念館建設計画は、日本初の写真美術館で前例がないこともあり、簡単には進みませんでした。しかも51年には酒田大火が発生。2年後ようやく建設地が決まり、「飯森山を土門拳記念館中心の文化公園にする」という構想が立てられますが、資金調達の面でまた難航します。しかし54年、土門が意識不明の重体となり、一刻の猶予もないと判断した酒田市は、ついに自己資金で進めることを決断。不足分は全国に寄付金として呼びかけることにしました。

昭和56年、募金活動のための土門拳記念館建設期成同盟会を発足。本間美術館元館長の佐藤三郎さんを代表に、発起人に市内や県内の政治家や財界人だけでなく、三木淳さんや岸洋子さんなど各界の第一人者も名を連ね、大規模な募金活動が始まりました。記念館職員の大竹佳代子さんは話します。「当時、発起人にあれだけの方々が集まったのは、土門さんの力を皆さんが本当に認めていたということでしょう。意識不明で寝ている土門さんの命があるうちに何とか記念館を建てよう、土門さんの作品を後世に残していこうと。それが目標額を上回る1億400万円の寄付金に結びついたんだと思います」

設計は、急逝した友人の谷口吉郎に代わり、息子の谷口吉生に依頼。谷口は何度も酒田を訪れて現地を視察し、自然と建築の調和を目指しました。また全ての作品に目を通し、友人を訪ね、芸術性や人柄を知ったうえで館内を設計。さらに土門と仲の良かった芸術家たちの作品を親交の証として記念館に残そうと、イサム・ノグチ、亀倉雄策、そして故勅使河原蒼風に代わり息子の勅使河原宏の3名に協力を依頼しました。昭和58年10月、こうして日本を代表する建築家の建物に、彫刻家、グラフィックデザイナー、華道家の力が加わった記念館が開館します。

残雪に輝く鳥海山を眺めながら記念館へと向かい、重厚な扉を開くと亀倉雄策の銘板が出迎えます。照明を落とした暗い通路で気持ちを落ち着かせ、展示室で土門作品とじっくり対峙。続く廊下で窓越しにイサム・ノグチの「土門さん」を観ながら緊張を解き、ガラス張りの記念室でひと休み。気持ちを新たに最後の展示室に入ると、正面に勅使河原宏の庭園が現れ、再び土門の新たな世界と出会います。

「こうした一連のストーリーを持つ記念館が、30年経った今も古くならずに現代的なのは、建物にも作品にも普遍的な美しさがあるからだと思います。物事の移り変わりが激しい世の中で、でも変わらないことの大切さを実感する人が増えて。そんな時代だからこそ記念館は、変わらず、皆さんの心の拠り所であり続けたいですね」。

平成2年、完成した記念館を見ることなく逝ってしまった土門拳。しかしその精神は土門芸術を愛する心が生んだ記念館に生き続け、土門が生涯追い求めた「日本人の心」を未来永劫伝えていきます。

土門拳記念館設計 谷口吉生

銘板 亀倉雄策

オブジェ 勅使河原宏「樹魔」

庭園 勅使河原宏「流れ」

彫刻 イサム・ノグチ「土門さん」

主要展示室

domon 特集 土門拳の肖像

土門拳賞

昭和56年に毎日新聞社の創刊110周年記念事業として開始。「写真界の直木賞」ともいわれ、1年間に発表された作品の中で、特に優れた成果を挙げた中堅の写真家が選ばれる。翌3月下旬発表。土門拳記念館ではその年の受賞作品展を毎年夏〜秋に開催。その後、作品は記念館に収蔵され、折をみて企画展示される。今年1月〜4月の第4回受賞作品展では、大石芳野『ベトナム凛と』や鬼海弘雄『PERSONA』などが展示された。

第32回土門拳賞受賞作品（2013.3発表）
亀山亮『AFRIKA WAR JOURNAL』
受賞作品展は12/18〜3/22。
亀山氏のギャラリートークは来年3/1に予定。

酒田市土門拳文化賞

平成6年に開館10周年を記念して開始。応募があった国内のアマチュア写真家の組写真から選考。審査員は藤森武氏、江成常夫氏、大西みつぐ氏。発表は3月上旬。その後、記念館で受賞作品展を開催し、作品は館内に永久保存される。今年は全国から147人が応募、文化賞1点と奨励賞3点が選ばれた。3月23日に授賞式を開催、記念館での展示は4月で終了したが、5/14〜27に新宿ニコンサロンで同展が開催される。

第19回酒田市土門拳文化賞（2013.3発表）
「仁淀川遡行」（モノクロ30枚組）
小林勝利（高知県高知市）

土門拳記念館

Ken Domon Museum of photography

〒998-0055 山形県酒田市飯森山2-13（飯森山公園内）
TEL.FAX.0234-31-0028
http://www.domonken-kinenkan.jp

開館時間　午前9時〜午後5時（入館は4時30分まで）
入館料　一般420円　高校・大学生210円
小中学生100円（土日は小中学生無料）
※20名様以上団体割引あり
休館日　4〜11月は無休（臨時休館あり）
12〜3月は月曜休（祝日の場合は開館、翌火曜休）

おからやのおからっきー

全国各地から注文が相次ぐ
「幻のクッキー」おからっきーは
子どもからお年寄りまで誰が食べても
クセになる、おいしくてやさしいおやつ。

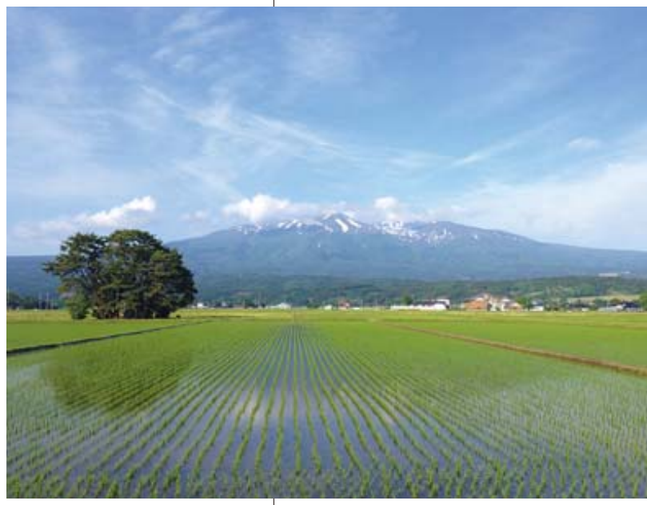
山形大学農学部の近くにこじんまりとした可愛いお店「おからや」がある。そこで製造・販売されているのが、猫のカタチの「おからっきー」。つくり手は、心身に障がいを持つ人たちだ。

もともとお店は伝統民芸品の製造を行う個人店だった。昭和45年、特殊学級の先生が教え子の就労先に困り、ふたりを連れてきた時からお店は福祉就労の場となった。「年々仲間が増える中で、人形づくりが嫌いという人も来るようになって、じゃあ何に興味を持つのか見ていると、お菓子にとても関心を示すんです。それで始めたのがクッキーづくりでした（笑）。ただうちはずっと制度的な援助を受けずに自力でやってきたものだから、とにかく貧乏で。無料でもらえる〝おから〟を使うと決めて、いろんな工夫をしましたのぉ」と施設長の大森和子さん。近くのコミセンの調理場で試作と作業訓練に明け暮れ、数え切れないほど失敗を繰り返し、その賜物としておからクッキーの常識を覆すサクっとした食感を実現。平成元年の販売スタートまでおよそ3年半の月日がかかった。

現在おからやでは、材料を量る人、練る人、焼く人、はさみでしおりを切る人、カードに絵を描く人など、一人一人細かく分業しながら商品づくりに励んでいる。27人全員の個性や能力を生かすこのカンペキな共同作業が生み出すのは、商品だけでなく彼らの仕事に対する誇り、生きることへの肯定感。そんな彼らのおからっきーは、クッキーもパッケージも手書きのカードや猫型しおりも、すべてがおからやの仲間のように明るくて楽しくて、手にする人にそっと元気を運んでくれる。

原料は地元産大豆のおから、きび砂糖、国産小麦粉、ショートニング。猫の形は、かつて世話をしてきたたくさんの捨て猫たちへの思いを込めて。ごまが入った「ごまえもん」は新商品。現在は「ねこさぶろー」も開発中。商品はおからやで店頭販売するほか、全国発送も可。経営する特定非営利法人花の会では、ほかにメール便配達業務も行っている。鶴岡市若葉町15-5。

おからや　0235-25-3460



特別企画 庄内俳句紀行

一滴のしたたりが生む湧水を巡る

田んぼに水が張られ、平野一面が夕陽に輝く頃、山は残雪の白さとブナの新緑に包まれる。朝日連峰、出羽山地、鳥海山麓の雪渓からしたたる一滴の水が、ブナ林のもたらす肥沃な大地に染み込み、数年から数十年かけて伏流水となり再び現れる。

鉛色の冬空を忘れさせる美しい青い空のもと、ブナの新緑に縁取られた鳥海ブルーラインを鉾立展望台まで上がる。人がかろうじてすれ違える登山道を歩くと、道の脇の雪庇から冬の終わりを告げる雪解のしずくが滴り、穿つ土の香りと共に、春の妖精といわれる猩々袴やシラネアオイが優しく迎えてくれる。振り返れば遥か眼下に日本海。潮目の中に海神のテーブルのような飛島を望む。さらに歩を進めると、白糸の滝の水音と、鳥海山の頂と渓の眺望に出会い、心が解き放たれる。

雪渓の尻尾引き込む日本海 ―敦子

旧国道七号線を海岸沿いに走ると、吹浦に芭蕉の句碑がたたずむ。

あつみ山や吹浦かけて夕すずみ ―芭蕉

これは「あつみ山」が「吹浦」の海に向かって夕涼みをしているという擬人化の句であり、芭蕉の門弟への挨拶句と思われる。「おくのほそ道」を旅した芭蕉一行が、酒田から象潟に向かったものの、途中雨が激しくなったのでここに一泊したのは、季節が少し過ぎる元禄二年六月十日（新暦七月三十一日）だった。

秋田との県境にある女鹿の集落の中心に、市井という言葉の由来のごとく「神泉の水」という湧水を引いた共同の洗い場がある。ここは六つの水槽に仕切られていて、何代も前から人々は、相互の水を汚さないというしきたりを守りながら、大切に使ってきた湧水である。

吹浦湾へとそそぐ月光川は、鮭の遡上する川として知られる。上流部にあたる支流の牛渡川は、流水のほとんどが湧水であるため透明度が高く、水温が一年中ほぼ一定である。六月中旬から下旬にかけては、清流にしか咲かない白い可憐な梅花藻の花が咲き乱れる。よく見ると流れの中には、カジカやヤマメ、イバラトミヨなど清い水を好む魚たちが生息している。この水が自然の恵であることを実感すると共に、清冽な印象として、いつまでも見る者の心に残るだろう。

泉湧くところ梅花藻靡きけり ―敦子

すぐ近くの森に、神秘的な丸池様がある。この池は伏流水からなり、深いエメラルドグリーンは時間帯や日光の屈折でみるみる表情を変える。この丸池様には古の言い伝えがあり、この水にすむ生物はすべて片目で、魚を捕ったり池を荒らしたりすると目が潰れるといわれてきた。そのため目の神様として地域住民に信仰されている。鬱蒼とブナが茂り、社叢がまるでこの池を守っているかのようだ。

米どころ酒どころの庄内平野は、豊富な名水を送り出す鳥海山と月山に育まれた豊穣の水の郷といえるのかもしれない。そのうえ山海の宝物にも恵まれたのは、ブナの原生林が育んだ伏流水がもたらす幸なのだろう。私はこの季節になると、ブナの声と湧水の音に耳を澄ます。その恩恵を体中に感じながら、またこの季節をゆっくりと歩いてみたい。

写真・文＝俵谷敦子（月刊俳誌「月の匣」同人）

丸池様の神秘な輝き

牛渡川の流れの中に咲く梅花藻

鉾立からの日本海の眺望

Cradle 旅行倶楽部

遊佐町の丸池様

鳥海山麓の湧水を ゆっくりと巡ります

天然岩ガキなど初夏の庄内の旬を味わいます。

行程

6/15（土）
酒田駅発（13：15）→
鳥海ブルーライン
鉾立→神泉の水→
道の駅ふらっと
【岩ガキ】
→丸池様・
牛渡川【梅花藻鑑賞】
ギャラリー＆ティールーム Sui【コーヒー】→
レストラン Nico【フランス料理】
ホテルイン酒田【泊】

●旬の天然岩ガキ

6/16（日）
ホテル発（8：30）→
胴腹滝【散策】→
高瀬峡【トレッキング】→
大松家【昼食】→
山居倉庫着【散策・買物】
酒田駅着（15：20）

高瀬峡

6/15 土 6/16 日

■募集人数　限定 12 名様
（最少催行人員 8 名様）

■ツアー代金（お一人様）24,500 円
クレードルサポーター割引の場合 23,500 円
（現地バス代、宿泊代、食事代等込）
※庄内までの交通費は含まれておりません。
※現地より係員がご案内いたします。
※申込締切 5/31（金）

少人数でゆっくりご案内します

■お問い合わせは
通話料無料 0800-800-0806
庄内 クレードル　検索

＜旅行企画・実施＞
〒997-0028　山形県鶴岡市山王町 8-15
株式会社 出羽庄内地域デザイン
山形県知事登録旅行業第 2-268 号